

Fétis, François-Joseph の和声理論とその二面性について

大迫知佳子

Fétis, François-Joseph (1784-1871) は 19 世紀のフランスやベルギーにおいて、非常に大きな影響力を揮った音楽理論家である。彼の主要な関心のひとつは、彼自身の和声理論を確立することであった。そのために、彼は、中世から彼の同時代までに先人達によって提示された諸和声理論の広範かつ詳細な調査を行い、和声理論についてのより深い理解を求めて、それを歴史的な文脈の中で考察した。

和声理論に関する Fétis の著述を詳細に検討することにより、以下のことが明らかとなる。つまり、Fétis は、和声が歴史を通して「進歩している」と信じていたようである。即ち、(2 音間の) 同時的音程から和音の形成に向かって「進歩」し、そして近代においては、Rameau, Jean-Philippe の和声理論から、Fétis 自身の理論、つまり、彼の云う「形而上学的な」調性システムに向かって「進歩している」と信じていたのである。この「進歩する」歴史の観点から、Fétis は他の理論家達によって規定された連続音程 (平行 5 度・平行 8 度等)、音程の分類、和音発生システムを分析・批判した。

彼の「歴史に沿った進歩」という考えは、彼の「4 つの調性システム」(「単調性的システム」、「移行調性的システム」、「複調性的システム」、「全調性的システム」) の概念にも示されている。つまり、これらのシステムは、和声 (即ち、調性) 構造の歴史的「進歩」の諸段階なのである。

一方 Fétis は、自分の時代における最新の「進歩的な」実践である「全調性的システム」の段階を超えるいかなる歴史的進歩も必要としないということを示唆している。彼は、「全調性的システム」の更なる拡大は調の壊滅を招きかねないと主張し、そのような諸作品を激しく批難した。更に彼は、「芸術は進歩しているのではない。変化しているのだ。」という、「進歩史的」な姿勢とは相反するような言説を残したことでも知られている。彼の確信に満ちた著述と理論が、相互に矛盾するとも思えるようなこうした二面性を孕んでいることは、興味深い事実である。